

# 「違和感」からの出発 日本人とキリスト教

山本芳久

yamamoto yoshiyusa

## 井上洋治神父とトマス・アクィナス

学生時代以来大変お世話になつた方に、井上洋治神父（一九二七—二〇一四）がいる。

カトリックの神父でありながら、フランス留学中に触れた西欧のキリスト教の在り方に違和感を抱き、留学仲間の遠藤周作と共に、日本人の肌に合つたキリスト教の在り方を追い求め、『日本とイエスの顔』や『余白の旅』といった多数の魅力的な書物を残した人物である。没後四年の今年、『井上洋治著作選集』全十巻（日本キリスト教団出版局）が完結した。

大学二年のときに神父の嘔咳に触れるようになつた私は、神父がその生涯を捧げた「キリスト教と日本人」というテーマが、私自身の生涯のテーマの一つとなるであろうことを予感しながら、神父によるミサや読書会・默

想会といった諸々の活動に参加していた。と同時に、学部三年生のときにはすでに、西欧

キリスト教神学の大成者であるトマス・アクィナス（一二二五頃—一二七四）の神学・哲学の研究に打ち込むことを決意していた。

井上神父がフランスで抱いた違和感の中心が、当時の神学教育のなかで教科書化されて教え込まれたトマス神学のうちにあつたとい

うことを見ると、私の選択には、ある意味、奇妙なところがあつたと言えるかも

しない。だが、相異なる複数の発想を自らの精神のうちに抱え込むことによってこそ、自らの思索に豊かな刺激が与えられていくのではないかと私は考えていたのである。

こうした模索の結果、私は、神学・哲学の研究者として、トマスを題材とした三冊の書籍をこれまでに上梓してきた。そのなかで

## も、『トマス・アクィナス 肯定の哲学』（慶應義塾大学出版会、二〇一四年）と『トマス・アクィナス 理性と神秘』（岩波新書、二〇一七年）は多くの読者に迎えられた。

「キリスト教神学」という我が国においては一般に馴染みのない分野に多くの読者が触れるきっかけを多少とも作ることができたと負している。

## 「洋服」と「和服」

これからは、狭い意味でのトマス研究という枠を超えて、神学・哲学に関わるより多様な著作を読者の方々に届けていきたいと考えている。現在、さまざまな書籍の構想を立てているところであるが、その一つとして考へておられるものとして、「違和感」を軸にしたキリスト教神学の構築というものがある。

遠藤周作と井上洋治は、キリスト教というだぶだぶの「洋服」を「和服」に仕立て直す作業を自らのライフケーストした。「洋服」と「和服」を対比させるこの有名な比喩は卓抜なものであるが、問題がないわけではない。現代の日本人にとって「和服」よりも「洋服」のほうが馴染み深いのではないかといふ突っ込みは脇に置いておくとしても、この比喩がある種の仕方で受け取ってしまうところにおいて誤解されてしまう虞れがあるのではないかと私は危惧している。

西洋文化の色合いが強いがゆえに日本人には「違和感」を与えるキリスト教を、日本人の心に馴染みやすい仕方で仕立て直すことによつて、「違和感」の少ない仕方でキリスト教の「神」を日本人が受け止め直すことができるようになるのではないか。もしも遠藤周作や井上洋治の目指した方向性をこのようにまとめることができるとした場合、そこには、完全には賛同することのできない面がある。問題点はどこにあるのだろうか。

「目が見もせず、耳が聞きもせず、

人の心に思い浮かびもしなかつたこと」

新約聖書の「コリントの信徒への手紙（一）」に、次のような一節がある。

「洋服」のほうが馴染み深いのではないかといふ突っ込みは脇に置いておくとしても、この比喩がある種の仕方で受け取ってしまうところにおいて誤解されてしまう虞れがあるのではないかと私は危惧している。

わたしたちは、信仰に成熟した人たちの間では知恵を語ります。それはこの世の知恵ではなく、また、この世の滅びゆく支配者たちの知恵でもありません。わたしたちが語るのは、隠されていた、神秘としての神の知恵であり、神がわたしたちに栄光を与るために、世界の始まる前から定めておられたものです。この世の支配者たちはだれ一人、この知恵を理解しませんでした。もし理解していたら、栄光の主を十字架につければしなかつたでしよう。しかし、このことは、「自分が見もせず、耳が聞きもせず、人の心に思い浮かびもしなかつたことを、神は御自分を愛する者たちに準備された」と書いてあるとおりです。（第二章第六—九節）

「この世の知恵」では思いもよらないよう

な仕方で、神は働きをなすと、この一節にお

いてパウロは述べている。十字架につけられたイエスこそ人類の救い主だなどという教えは、「この世の知恵」にとつては愚かなことであるが、それこそが「神祕としての神の知恵」なのだと述べている。そして、パウロは、旧約聖書の「イザヤ書」の第六十四章第三節と第六十五章第十七節を組み合わせつつ、神がイエスの十字架を通じて実現したこ

とは、「目が見もせず、耳が聞きもせず、人の心に思い浮かびもしなかつたこと」だと述べている。十字架につけられたイエスこそ人類の救い主だというキリスト教の信仰は、キリスト教が生まれる母体となつたユダヤ教を信仰していた人々にとっても、哲学的な知恵を求めていたギリシア人にとっても、まったく思ひがけないことであった。「ユダヤ人はしをを求め、ギリシア人は知恵を探しますが、わたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝えています。すなわち、ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かなものですが、ユダヤ人であろうがギリシア人であろうが、召された者には、神の力、神の知恵であるキリストを宣べ伝えているのです。神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです」（「コリントの信徒への手紙（一）」第一章第二十二節—二十五節）。

別の言い方でいえば、ユダヤ人にとっても、ギリシア人にとっても、「十字架につけられたキリスト」は「違和感」を与えるものであった。キリスト教の教えは、最初から、「違和感」と不可分のものだったのである。

「十字架につけられたキリスト」が「違和

感」を与えるものであること、キリスト教の教えが「違和感」と不可分のものであることは、単に、ここで引き合いに出されている「ユダヤ人」や「ギリシア人」が、キリスト教の信仰をもたない人々であつたからではない。また、原始キリスト教時代に入信した人々が特別な「知恵」を有さない人々であつたからでもない。一生を「知恵の探求(studium sapientiae)」に費やしたトマス・アクイナスもまた、次のような言葉を残している。

神は、人間が神について知りうるかぎりのすべてを超えるものであることを信ずるとき、ただそのときのみ我々は神を真実に認識する。

#### (『対異教徒大全』第一巻第五章)

神とは何であるかについて我々が無知であることを知っていること、まさにそのことが神を認識することにはかならない。

(『ディオニシウス『神名論』註解』  
第七章第四講第七三節)

次のことが神についての人間的認識の究極である。すなわち、我々が神について理解することとのすべてを神の本質は超

えている、ということを認識しているかぎりにおいて、自分が神について無知であること知つてることである。

#### (『能力論』第七問題第五項 第十四異論解答)

トマスの主著である『神学大全』は、二千年に及ぶキリスト教思想史を代表する体系的著作であり、日本語訳で四十五巻にも及ぶ大著である。このような巨大な体系的著作前によると、一見、トマスは神のことを理解し尽くし、語り尽くしているかのように思われるかもしれない。だが、そのトマスが膨大な著作群のなかで再三にわたって人間の神についての無知を強調しているのは極めて興味深い事実である。

い。彼は、『神学大全』の完成が間際に迫っていた一二七三年一二月六日、ミサの最中に深い宗教的体験に心打たれ、以後、すべての著作活動を放棄した。僚友のレギナルドウスから著作の続行を迫られたトマスは、「レギナルドウスよ、私はできない。私が見、私が示されたことに比べると、私が書いたすべてのことは藁屑のよう見えるのだ」と語り、以後二度と筆を執ることはなかった。

『神学大全』を永遠に未完結のものとさせてしまったこの出来事は、この書物を愛読する人々に痛恨の念を抱かせるものだ。この出来事さえなければ、そしてトマスがもう少しだけ書き続けてくれたならば、史上稀に見る体系的な神学書である『神学大全』を完全な仕方で目にすることができたであろうに、

だが、この出来事があつたからこそ、そして『神学大全』が未完の書物に留まつたからこそ、我々は、人間の作る言語世界に收まり切ることのない神の「超越性」をありありと認識することができる。人間がどれだけ優れた体系的な神学的世界觀を構築しようとも、そしてその神学が適切なものであつても、神はそのような神学的世界觀に回収し尽くすことのできない他者として留まり続ける。そうした意味での「超越性」に基づいた「違和感」を与える神の決定的な働きかけによつて

トマスの「沈黙」

トマスは人間理性による把握を徹底的に超えているということを徹底的に自覚することこそが人間による神認識の究極だという趣旨のトマスの見解が述べているのは、神に対する「違和感」というよりは、神の「超越性」に対する強調と言つたほうがいいかも知れない。

トマスは、その生涯の最後に、神の「超越性」についての決定的な体験をもつた。何が起つたのか、その詳細は我々にはわからぬ

こそ、『神学大全』という書物は、画竜点睛的な仕方で最後の仕上げを与えられたとも言えるのである。

### 「違和感」からの出発

日本人とキリスト教という、冒頭の問題に戻つてみよう。キリスト教というだぶだぶの「洋服」を「和服」に仕立て直す、という遠藤周作の表現が、計り知れない神の「超越性」という意味での「違和感」を解消してしまふような仕方でキリスト教のメッセージを語り直すということを意味するのであれば、それはキリスト教の本質を否定することにほかならず、賛同することはできない。だが、遠藤の言明は、それとは別の仕方で受け止め直すことができるだろう。

二つの「違和感」を区別すると話が見えやすくなつてくる。すなわち、まず第一に、「神が人となる」とか「十字架にかけられたイエスこそ救い主である」とか「キリストは死者の中から復活した」というように、その事柄 자체のうちに、人間の自然なものを受け止め方に收まりきらない要素がある、そういう意味で「違和感」を与える要素がキリスト教のうちにはある。そのような違和感は、日本人だけが感じるようなものではなく、ユダヤ人であれギリシア人であれ、キリスト教に出会う人が自ずと感じざるをえない「違和

感」である。逆に、こうした「違和感」を何ら抱くことなくキリスト教を信仰している人がいるとすれば、それはそもそも、人間の理性には計り知れない徹底的な「超越性」を有するキリスト教の神に対する信仰と言えるのだろうか。

神学者たちは、このような「違和感」を与えるキリスト教の中核的なメッセージから目を背けることなく、「目が見もせず、耳が聞きもせず、人の心に思い浮かびもしない」仕方ではたらく神を何とかして言語化して捉えようとあらゆる努力を傾けてきた。その際、彼らが大きな助けとして援用したのが、古代ギリシアで形成された哲学にほかない。三位一体論であれキリスト論であれ、キリスト教の基本的な教えの確立において、「实体」「本質」「関係」「本性」といった古代ギリシア哲学において形成された概念の果たした役割には、いくら強調しても強調しきれないほど大きなものがある。

だが、ギリシア哲学的な発想に親しんでいない多くの日本人にとって、こうした抽象的な哲学的諸概念を駆使しながら形成された西洋由来のキリスト教神学に馴染みにくさを感じる、そういう意味での「違和感」を感じる、ということは自然なことであり、そうした意味での「違和感」にこだわるのもまた大切なことだと思われる。

遠藤や井上が述べているように、たしかに、キリスト教は多くの日本人に「違和感」を与えるということがあるかもしれない。だが、その「違和感」というものは、日本人とキリスト教との関係を阻害するものとして否定的に考える必要は必ずしもないのではないだろうか。むしろ、「違和感」は、キリスト教的な神の在り方を探求するさいに、障害になるどころか、とつかかりになる面がある。

西洋由来の神学から徹底的に学びつつも、日本文化を背景に置くときに浮かび上がる西ヨーロッパの神学に対する「違和感」をも大切にしながら、キリスト教の教え——それは計り知れないものという意味での「違和感」を人間に与え続けるものである——を捉え直していくこと。こうした仕方で「違和感」から出发し、「違和感」を軸にした仕方で構築することのできるキリスト教神学というものがありうるのではないか。「神」に対する「違和感」を抱きがちな現代人にとって、こうした神学こそ、むしろ馴染みやすいのではない。そんなことを思い浮かべながら、いずれ書き上げるべきキリスト教神学に関する書物の構想を温め続けている。

(やまもと よしひさ・東京大学大学院准教授  
著書に『トマス・アクィナス 理性と神秘』(岩波新書)など)